子ども学習シート

入口

家族の別れ

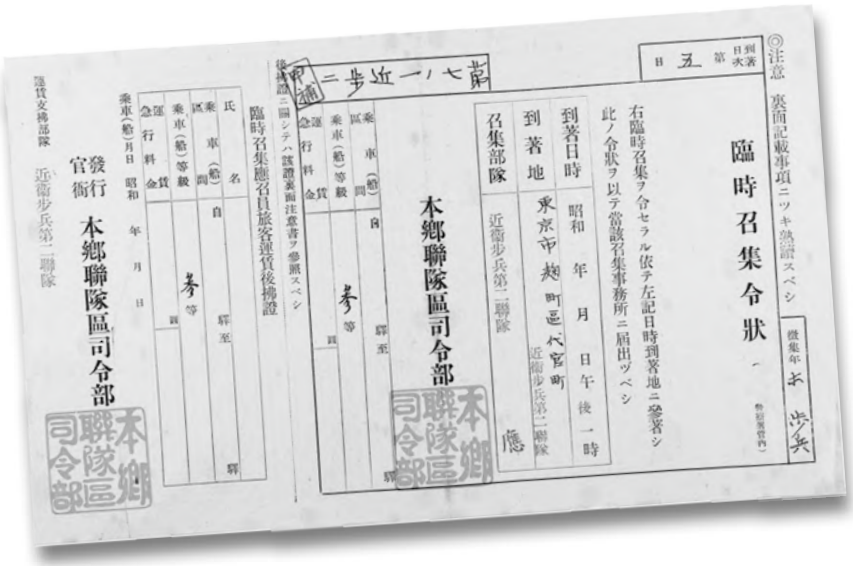
かぞくのわかれ

昭和館常設展示室

今から80年以上前、昭和12年(1937)7月に、日本軍と中国軍が北京の郊外で衝突して、全面的な「日中戦争」が起こりました。その当時は、男子が20歳になると、兵士になるための「徴兵検査」を受けることが義務づけられていました。検査に合格し軍隊の勤務につくことになった人は、現役兵(現在兵役についている兵士)として2～3年軍隊で過ごしました。戦争の拡大に伴い、現役期間が終わった人や徴兵検査に合格して兵役についていなかった人に、「臨時召集令状(赤紙)」が家に届けられ、決められた日時に決められた場所へ急いで出頭しなければなりませんでした。その後、それぞれの部隊で訓練を受け、「出征兵士」として戦場へ送られて行ったのです。

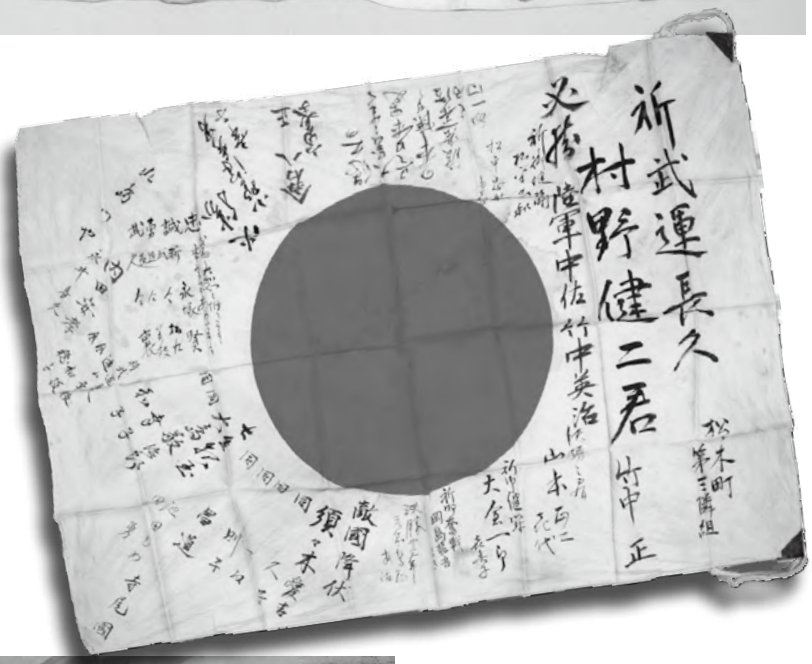
徴兵検査
昭和16年(1941)4月　藤本四八(JPS)撮影

赤紙を受け取った家の母親や妻たちは、一家の働き手として生活を支えている大切な息子や夫の無事を願って、「千人針」を急いで準備しました。千人針とは、布に女性から一針ずつ糸で玉を結んでもらったお守りのことです。家族や親戚・隣近所の女性だけではなく、街頭へ出て道を通る女性にまでお願いして作り上げました。出征する男性は、「鉄砲の弾が当たらないように」「無事に日本へ帰って来られるように」という女性たちの願いや祈りの込められた千人針を持って、戦場へ向かいました。


臨時召集令状
右臨時召集ヲ令セラル依テ左記日時到著地ニ參著シ
此ノ令狀ヲ以テ當該召集事務所ニ屆出ツベシ
到著日時　昭和　年　月　日午後一時
到著地　東京市麹町區代官町
召集部隊　近衛歩兵第二聯隊
本郷聯隊區司令部
臨時召集應召員旅客運賃後拂證
氏名
乗車区間
乗車(船)等級
運行料金
運賃
昭和　年　月　日
發行官衙　本郷聯隊區司令部
近衛歩兵第二聯隊

臨時召集令状(赤紙)複製

千人針　昭和15年(1940)



日の丸寄せ書き　昭和19年(1944)

ありましたが、それは「虎は千里(とても遠い所)を走り、千里を帰る強い動物」という言い伝えがあったからです。また寅年生まれの女性に限り年齢の数だけ糸玉を結ぶことができるとされていました。さらに、「死線(４銭)を越える」という意味で当時の５銭硬貨が、「苦戦(９銭)をまぬがれる」という意味で10銭硬貨が縫い付けられることもありました。

出征が決まると、千人針のほかに、地域の人や友人たちが寄せ書きをした日の丸の旗や大きな幟を作って、お祝いや激励をしました。そして、学校の校庭や神社の境内などで、家族や親戚・隣近所の人、同じ職場の人たちが集まって、盛大な壮行式を行い、出征兵士を戦地へと送り出したのです。しかし、戦争が長期化してくると、徐々に盛大な見送りは行われなくなりました。

出征記念
東京神田　昭和13年(1938)頃

昭和館　〒102-0074　東京都千代田区九段南 1-6-1
TEL 03-3222-2577 ／ FAX　03-3222-2575　https://www.showakan.go.jp

子ども学習シート

第１ブース

昭和10年頃の家庭

昭和館常設展示室

しょうわ10ねんごろのかてい

昭和10年(1935)頃、電気はすでに日本全国に普及していましたが、家庭電気製品といえば「電灯」と「ラジオ」くらいのものでした。ラジオは、数少ない娯楽の一つでしたが、値段が高く、3割ぐらいの家庭にしか普及していませんでした。

都市の一部にしか水道やガスはなかったので、多くの家庭では、「ポンプ」や「井戸」などでくみ上げた地下水を炊事や洗濯、お風呂などに用いていました。また、「カマド」や「七輪」「いろり」で薪を燃やしてご飯を炊き、煮物などを作りました。

家庭の仕事は、ほとんど手作業で行われていました、特に炊事・洗濯・縫い物などは、主に母親など女性の役割とされ、女性たちは、一日中忙しい家事に追われ

井戸端で洗濯をする女性
昭和10～15年(1935～1940)頃

洗い張り　昭和13年(1938)頃　島本京子提供

ていました。洗濯は、「タライ」に水をくみ、洗濯用の堅いセッケンを用いて、洗濯板でゴシゴシと手でこすって洗いました。当時は国の方針として、「生めよ殖やせよ強く育てよ」と子どもをたくさん生み育てることが奨励されていたので、母親たちは、たくさんの子どもの洗濯に忙しく、一年中、あかぎれで手が赤くはれていたといわれています。

都市部を中心に洋服も普及していましたが、多くの女性はまだ「着物」を着ていました。着物や布団が汚れると、ほどいて反物(布)の状態に戻して洗い、「張り板」に張って乾かしました。そしてまた元どおりに縫い直すというように、大変な手間と時間をかけて着物や布団をきれいにしました。

一般的な家庭の母親は、子どものものをはじめ家族の着物なども、ほとんど自分で作りました。裁縫ができないと母親の務めを果たすことができないので、女の子は小学生の頃から熱心に裁縫の勉強をしました。そして、女の子だけでなく男の子も貴重な労働力として、いろいろな家の仕事を手伝っていました。

下水道がまだ整備されておらず、汚水は道路の側溝に流しました。トイレは、主にくみ取り式のため、衛生状態はよくありません。さらに、ゴミなどの汚れたものの始末の仕方がよくなかったので、ハエなどの害虫がたくさん発生して、恐ろしい伝染病が流行することもありました。そこで、色々な「ハエ取り器」が作られましたが、それらを用いても駆除するのには大変苦労しました。

暖房器具は、北海道などの寒冷地では「石炭ストーブ」などを使用していましたが、ほかの地域では部屋を暖めるのではなく、「火鉢」や「コタツ」「アンカ」など手足を暖めるための器具が主に使われていました。冬は今と比べるととても寒く、多くの家屋は木造のため、戸のすき間から冷たい風が入ることもあり、綿がたくさん入っている厚い着物などを着て、寒さに耐えながら過ごさなければなりませんでした。

当時は、今のように病院や薬屋は多くありませんでした。子どもが怪我や下痢、風邪を引いたりしたときには、家庭にある「置き薬」などを飲むくらいで、よほどの重い病気でないと医者にはかかりませんでした。

ハエ取り器

ドーナツ状の底の部分に水を入れ、穴の真下にハエをおびき寄せるためのえさを置いた。ハエは垂直に上がる習性があるので、えさにたかった後に飛び立とうとする時にガラス瓶の天井にぶつかり、それをくりかえすうちに水面に落ちてしまうという仕組みである。

NO IMAGE

東京下町のサラリーマン家庭の食卓
昭和15年(1940)10月　藤本四八(JPS)撮影

子ども学習シート

第２ブース

統制下の暮らし

とうせいかのくらし

昭和館常設展示室

昭和12年(1937)に日中戦争が始まり、昭和16年(1941)12月8日、日本軍はハワイの真珠湾を攻撃して、アメリカやイギリスなどを相手に「太平洋戦争」を始めました。戦争は、中国大陸、東南アジア、西太平洋地域に及びました。

戦争では、たくさんの兵士が使う武器や軍服、軍靴、鉄かぶと、そして食糧などの物資が大量に必要となります。日本の国は、昔から地下資源をはじめ、物資が豊かではなく、その上、外国からの輸入が停まったので、国民生活で使われている金属製品や革、布、ゴムなどの様々な物資が不足していました。

そこで、生活に必要な用具として陶器で作られたアイロンや湯たんぽ、竹で作られたランドセル、紙で作られたヘルメット、化学繊維で作られた「スフ」がまじった洋服などの、粗末な「代用品」が登場したのです。

ランドセル(竹製)　複製

ポスター「戦場へ活かせ銃後の銅と鉄」
昭和17年(1942)頃

『食べられる野草』
昭和18年（1943）
食用野草の解説書。手頃な代用食として、あくぬき、調理法、保存法も紹介されている。

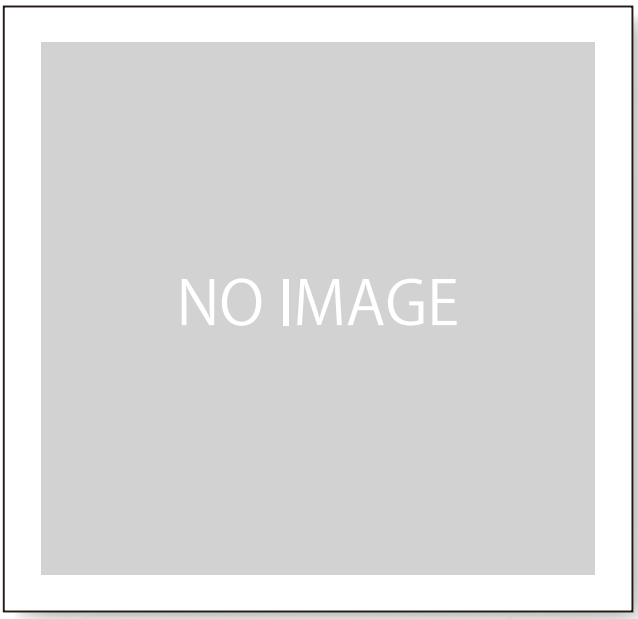
衣料切符
昭和17年（1942）

さらに、家庭で使っていた洗面器やヤカン、バケツ、包丁やナイフ、服のボタン、お寺の鐘、学校や役所の門などあらゆる金属類を国へ供出し、国ではそれらを溶かして、さまざまな武器を作ったのです。

戦争が長期化したために、あらゆる生活物資が不足して国民生活がますます苦しくなってきました。そこで、少ない食料品や品物をお互いに分け合う「配給制度」という仕組みができました。マッチ、砂糖、米、小麦粉、お酒、木炭、魚、塩、衣服、みそ、しょう油、野菜、果物などの生活必需品を買うときには、国から配られた「購入切符」を「隣組」から受け、商店などの配給所で買わなければなりませんでした。

特に食糧不足は、年々深刻になっていきました。農村や漁村の人手不足などから、米や魚など生産量、漁獲量が低下し、食糧が足りなくなったのです。主食の米が不足してくると「代用食」として、小麦粉・サツマイモ・ジャガイモなどが配給されました。そして米を倹約した豆・野菜入りのご飯やおかゆ、雑炊、すいとんなどの食事が当たり前になりました。また、肉や野菜の代わりにイナゴ、カボチャの種、サツマイモのつるまで食べました。そして、少ない食糧を少しでも増産するために、一般の人たちも家の庭や学校のグラウンド、公園、河原などの空き地を畑にして、トウモロコシ、サツマイモ、カボチャなどの野菜を作り、食糧不足を少しでも補う努力をしました。

配給の購入切符が無くなると、それ以上買うことはできません。大人も子どもも少ない食料品や品物で、「ほしがりません、勝つまでは」、「ぜい沢は敵だ」を合言葉として、品物不足や空腹を我慢しながら戦争に協力したのです。



隣組の配給所　昭和16年（1941）8月
梅本忠雄撮影・立命館大学国際平和ミュージアム提供

昭和館　〒102-0074　東京都千代田区九段南 1-6-1
TEL 03-3222-2577 ／ FAX　03-3222-2575　https://www.showakan.go.jp

子ども学習シート

第３ブース

戦中の学童・学徒

せんちゅうのがくどう・がくと

昭和館常設展示室

昭和16年（1941）４月から、「尋常小学校」が「国民学校」と名前を変え、初等科が６年間、高等科が２年間の、合わせて８年間の学校となりました。子どもたちは「少国民」と呼ばれ、将来は立派な兵士になり、敵国と戦い、日本を守る国民にになることが期待されました。学校行事でも、儀式・礼法・団体訓練が重視され、教科書の内容も軍国主義的なものになりました。授業の一部では、男子は剣道や柔道、銃剣術などを、女子はなぎなたや看護などの訓練が行われるようになりました。また、ノートや鉛筆、消しゴムなどの学用品が不足し、な

国民学校の授業風景　昭和18年（1943）

「ヨミカタ　一」
（国民学校初等科１年前期用）
昭和16年度から使用された国定第5期本で、「アサヒ読本」と呼ばれている。

なぎなたの訓練
昭和18年（1943）

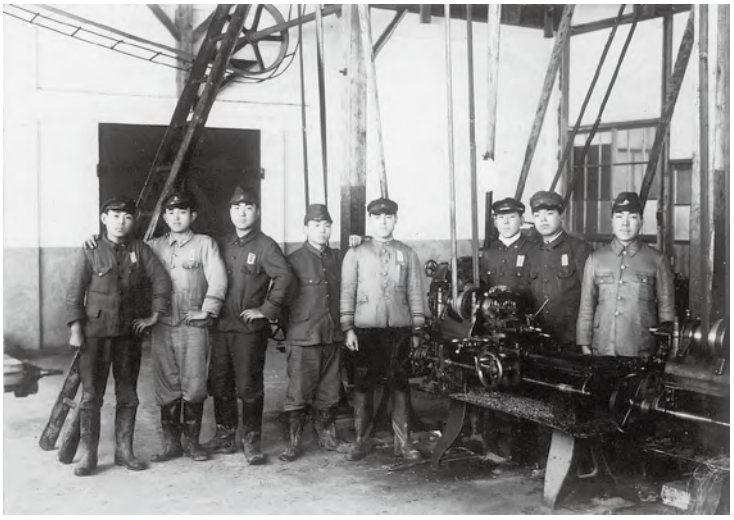
かなか手に入らないので、節約しながら丁寧に使いました。

戦争が長期化してくると、政府は国民学校高等科や中学校、女学校の生徒に対して、学校での勉強を一時中断して、工場や農村で働くようにという命令を出しました。生徒たちは「学徒勤労動員」として労働力の不足を補うために、空腹を我慢しながら、日本の勝利を信じて、慣れない仕事を懸命にしました。

太平洋戦争は、初めは日本軍が優勢で南の島々を占領しましたが、その後はアメリカ軍が反撃に転じて、グアム島やサイパン島などを日本から奪い取りました。

日本本土への本格的な空襲が予想されるようになると、政府は、都市部に住んでいる子どもたちを、空襲の少ない地方へ移動させる「学童疎開」を進めました。東京、横浜、名古屋、大阪などから、親戚のある子は「縁故疎開」を、親戚のない子は学校ごとに友達と一緒に先生に引率されて、地方のお寺や旅館へ「集団疎開」しました。

幼い子どもにとって、両親と別れての疎開生活は、つらく苦しいものでした。



小松製作所粟津工場へ勤労動員として派遣された生徒たち　昭和19年（1944）

疎開先での食事・杉並第二国民学校（現・杉並区立杉並第二小学校）の学童　昭和20年（1945）

食べ物は粗末で少なく、一日三食を食べられない日もあり、絶えずひもじい思いをしていました。特に夜は寂しく、毎晩のように下級生の部屋からは親を恋い慕う泣き声が聞こえ、先生や上級生が励ましに行ったといわれています。

疎開先でかいた絵

小山忠雄さんが牛込区（現・新宿区）学校連合寮の東京都立小湧谷戦時疎開学園で昭和19年7月から20年10月まで箱根で集団疎開した際にかいたもの。たきぎ拾いに行ったときの様子が描かれている。

昭和19年（1944）7月から20年10月

昭和館　〒102-0074　東京都千代田区九段南 1-6-1
TEL 03-3222-2577 ／ FAX　03-3222-2575　https://www.showakan.go.jp

子ども学習シート

第４ブース

銃後の備えと空襲

じゅうごのそなえとくうしゅう

昭和館常設展示室

昭和19年(1944)末頃から空襲はさらに激しくなりました。各家庭では、縁の下や庭、道路わきに「防空壕」を掘ったり、「防火用水」などを用意して空襲に備えたりしました。夜は電灯の明かりが窓から外に漏れないように黒いカーテンを引き、電球には大きな「黒い笠」や布を掛けました。空襲のサイレンとともにとび起き、家の大切な物や水、乾パン、いり米、いった大豆、梅干しなどの腐らない食料品を携帯して防空壕に避難しました。

防空訓練

昭和15年(1940)　石川光陽撮影

空襲は、当初は兵器を作っている軍需工場などが攻撃されましたが、徐々に住宅密集地域にも「焼夷弾」が落とされるようになりました。焼夷弾とは、大きな金属の筒の中にゼリー状のガソリンや黄燐などの燃えやすい発火物が入っており、物にぶつかると破裂して火を吹き出す恐ろしい兵器のことです。当時の日本の住宅は木造で非常に燃えやすいため、焼夷弾はすさまじい火災を発生させて一面火の海と化しました。激しく燃える火に囲まれ、逃げ場を失った多くの人々は、防空壕や川の中などに避難したにもかかわらず焼死する人もいました。

灯火管制下での夕食

昭和19年(1944)1月　菊池俊吉撮影

空襲下の東京
昭和20年(1945)3月　石川光陽撮影

昭和20年(1945)３月10日の未明には、東京上空に、およそ300機のB29の大編隊が現れました。そして、何千何万という焼夷弾が投下されてたくさんの家が燃え、防空壕や川の中に避難した人々までも含め、10万人以上の人々の尊い命が失われました。空襲は東京や大阪、神戸、名古屋の大都市だけでなく、全国各地の都市にも行われました。その後、昭和20年８月６日には広島に、９日には長崎に、人類史上初めての恐ろしい原子爆弾が落とされたのです。

神戸空襲
昭和20年(1945)6月5日　米国国立公文書館提供

子ども学習シート

昭和20年8月15日

しょうわ20ねん8がつ15にち

昭和館常設展示室

昭和20年(1945)7月26日、アメリカ・イギリス・中国の三か国により、戦争の終結と戦後処理のあり方について記した、ポツダム宣言が発せられました。昭和20年(1945)8月15日の正午、昭和天皇はその宣言を受け入れ、国民に対してラジオの「玉音放送」で、大きな犠牲をはらった悲惨な戦争の終わりを告げました。国民は、驚きと悲しみの気持ちにおそわれるとともに、将来への不安をつのらせました。

戦争が終わると、アメリカ軍を中心とした連合国軍が日本に進駐し、その後6年間にわたって日本は、占領下におかれました。GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）は、日本が民主的な平和国家として再出発するよう数々の改革を進めました。日本政府は、昭和21年(1946)11月３日に、GHQと相談してつくりあげた「日本国憲法」を公布、翌年の５月３日に施行し、ここに新しい国造りが始まりました。

昭和館　〒102-0074　東京都千代田区九段南 1-6-1
TEL 03-3222-2577 ／ FAX　03-3222-2575　https://www.showakan.go.jp

子ども学習シート

第５ブース

廃墟からの出発

はいきょからのしゅっぱつ

昭和館常設展示室

上野の闇市

昭和20年（1945）11月　菊池俊吉撮影

DDTの散布

昭和21年（1946）　米国国立公文書館提供

戦争がようやく終わり平和な時代を迎えました。空襲がなくなり、生き残った人々は、安心して眠れるようになりました。しかし、食糧不足は深刻で、特に体の弱い幼い子どもや老人が、栄養失調で苦しみました。多少体力のある親たちは、必死になって農村地帯へ「買い出し」に出掛けましたが、分けてもらえたのはわずかばかりの芋やカボチャなどでした。

昭和20年（1945）は、冷夏と働き手や肥料不足などのために米が不作で、多くの人が餓死するおそれがありました。政府は、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）に食糧などの緊急援助を要請し、国民はかろうじて食糧危機を乗り越えることができました。

戦災等による被害があまりにも大きかったため、あらゆる産業の生産が低下し、生活に必要な物資が足りません。大きな駅前広場などには、公には認められていない「闇市」ができ、なかには色々な品物を驚くほど高い値段で売る商人もいました。品物を手に入れようと多くの人が集まったため、値段がますます高くなりました。特に基準価格よりも非常に高かったのが、砂糖の264倍、米の132倍、そして浴用セッケンの200倍でした。そのため、一般の人々は、それらの食料品や生活用品をなかなか買うことができず、一層苦しい生活に追い込まれていきました。

焼け跡に立つバラック・三宅坂付近
昭和20年(1945)11月　石川光陽撮影

空襲で家を失った人たちは、焼け残った材木やトタン板などでバラック(粗末な仮小屋)を造り、電気やガス、水道、トイレも無い中で不自由な生活を送りました。衛生状態が非常に悪いためにネズミなどが増え、伝染病の病原菌をうつすノミやシラミも大量に発生しました。その頃は全国的にも恐ろしい伝染病が流行し、多くの人たちが亡くなりました。そこで日本政府とGHQは、「DDT」という強力な殺虫剤を人々に散布してノミやシラミを駆除し、ようやく恐ろしい伝染病を予防することができました。DDTは、現在では人体に害を与えるということで製造が禁止されています。

食料品、住宅、衣服などが極度に不足しているため、人々の生活は非常に苦しいものでした。そのようななか、海外から約650万人の引揚者が帰国しました。物資不足は厳しかったものの、家族が共に暮らせるようになったことは、人々の生活に明るさをもたらしました。

人々は、苦しいながらも、数々の民主的な改革や新しい憲法の施行などで、将来への明るい希望と夢を抱き、協力しながら生き抜く努力を続け生活しました。

戦後初の衆院選　女性も投票
昭和21年(1946)4月　米国国立公文書館提供

昭和館　〒102-0074　東京都千代田区九段南 1-6-1
TEL 03-3222-2577 ／ FAX　03-3222-2575　https://www.showakan.go.jp

子ども学習シート

第６ブース

遺された家族

のこされたかぞく

昭和館常設展示室

戦争が長引いたため、中国大陸や太平洋の戦場で、一家の大黒柱である夫や父親たちが、命を失いました。そのため遺された妻や家族は、大きな悲しみに加えて、収入が途絶え、これからどうやって生活したらよいか途方に暮れてしまいました。

たくさんの幼い子どもを抱えている母親たちの多くは、子どもを背負いながら、安い賃金で隣近所から頼まれた縫い物や様々な内職をしました。なかには、幼い子どもを預け、建築現場などで慣れない力仕事をしながら、血のにじむような努力を続け、子どもたちを必死に育てた人もいました。

焼け跡を歩く母子
昭和20年（1945）9月　米国国立公文書館提供

授産所で内職をする戦没者妻
昭和22年（1947）11月　米国国立公文書館提供

母親の苦労を少しでも軽くしようと、年長の男の子たちの中には「新聞少年」として、朝晩のつらい配達の仕事などに精を出す子もいました。年長の女の子は、「小さなお母さん」となって炊事・洗濯の家事や弟や妹の子守りなどもして、母親の内職の時間が少しでも長くとれるよう、家族が一体となっ

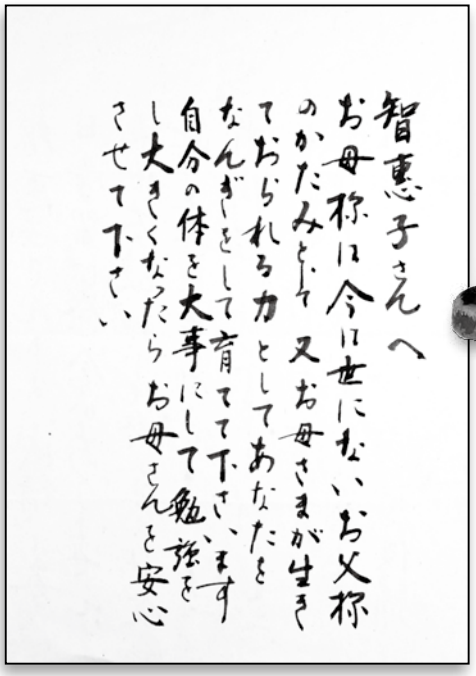
て助け合い励まし合って生活をしました。

昭和22年（1947）４月から、学校制度が現在と同じになり、小学校６年間、中学校３年間、合計９か年が義務教育となりました。父を失った中学校の卒業生たちの中には、家計を助けるために高校への進学をあきらめ、工場や商店などに就職して働く子どももいました。

なかには向学心をもち続け、昼間は働いて家計を助け、夜は４年間の定時制の高等学校などで勉強ををする子どももいました。そして疲れた体に鞭打って、努力に努力を重ねながら、自分の進路を切り開いていったのです。

ミシン　昭和12年（1937）から

愛知県の真弓重子さんが洋裁に使用していたもの。夫の英雄さんが昭和12年(1937)12月に戦死してから、洋裁で生計を立てていた。当初、婦人服を仕立てていたが、やがて流行に左右されない紳士服を仕立てるようになった。


智恵子さんへ
お母様は今は世にない、お父様
のかたみとして又お母さまが生き
ておられる力としてあなたを
なんぎをして育てて下さいます
自分の体を大事にして勉強を
し大きくなったらお母さんを安心
させて下さい

先生からの手紙

遺児である米田（旧姓江並）智恵子さんが、小学校４年生の時担任の先生からもらった手紙。

昭和26年（1951）

昭和館　〒102-0074　東京都千代田区九段南 1-6-1
TEL 03-3222-2577 ／ FAX　03-3222-2575　https://www.showakan.go.jp

子ども学習シート

第７ブース

子どもたちの戦後

こどもたちのせんご

昭和館常設展示室

戦争によって家族を亡くした子どもたち、いわゆる「戦災孤児」がたくさんいました。また戦後の混乱で両親をなくして独りぼっちになった孤児と合わせると、全国で約12万人もいたのです。

孤児の多くは、親戚に引き取られましたが、親戚のない子は孤児院に入れられました。孤児院に収容された子どもの中には、そこを逃げ出し、都会で路上生活を始めるものもいました。夜は大きな駅の構内で寝て、昼間は靴みがきや吸い殻を売ったりして、わずかばかりのお金を稼ぎながら、かろうじて生き伸びました。しかしながら、飢えや冬の寒さ、栄養失調などのために、多くの孤児が命を失いました。

全国各地に駐屯しているアメリカ兵が、ジープに乗って街へやってくると、甘い物に飢えている子どもたちがジープを取り囲んで、「ギブ・ミー・チョコレート（チョコレートちょうだい）」と言いながら手を差し出しました。それは、現在の飢えに苦しむ発展途上国の子どもたちと同じです。

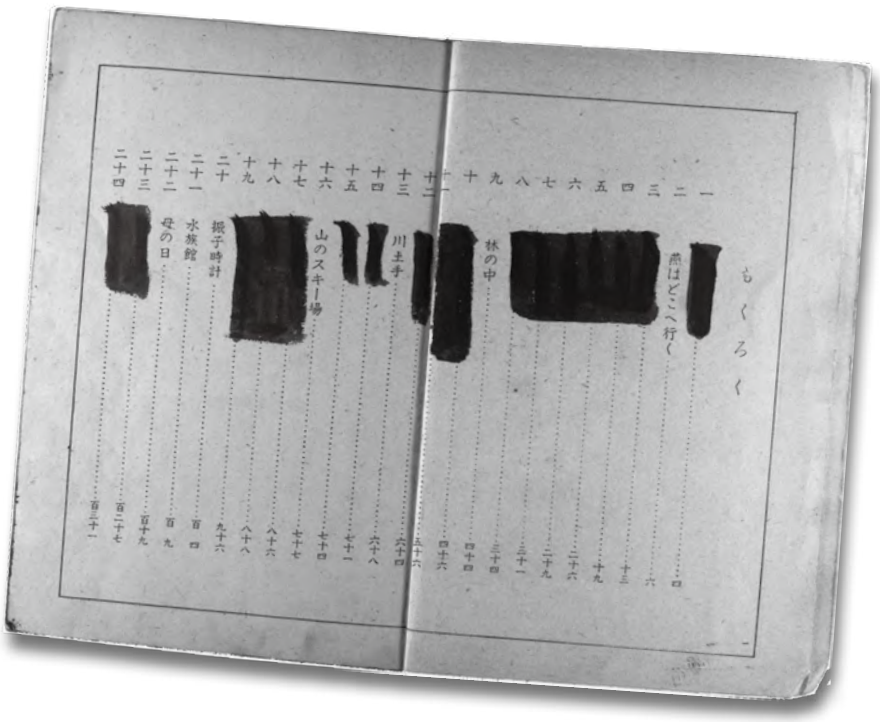
街角の戦災孤児
昭和24年（1949）頃　マッカーサー記念館提供

ギブミーチョコレート
昭和20年（1945）9月
米国国立公文書館提供

都市部では空襲によって多くの学校が燃えて無くなりました。疎開していた子どもたちが帰ってくると、教室が足りなくなったため、校庭を教室代わりにして授業する「青空教室」が行われました。また、１つの教室を２つのクラスで交代して使う「２部授業」をした学校もありました。教科書はまだ新しいものは

なく、戦争中のものを使いました。戦争を称えた内容の箇所を墨で黒く塗りつぶした「墨塗り教科書」を使って授業が行われました。

戦後の厳しい状況下におかれている日本の子どもたちの様子が、海外に報道されると、世界各国から「ララ物資」などの援助物資が送られてきました。その後、国際連合の「ユニセフ（児童基金）」からも15年間にわたって援助を受けました。主な援助物資としては、食糧や衣料、医薬品などがありました。その援助物資のお陰で学校給食が始まり、多くの日本の子どもたちが飢えや病気などから救われたのです。



墨塗り教科書「初等科国語　四」（国民学校初等科4年後期用）

食べ物もなく、粗末な家に住み、汚れた衣服を着ていても、当時の子どもたちは元気一杯遊びました。男子は、手作りの粗末な道具で野球などをしました。女子の間では、縄とびや鬼ごっこ、ドッジボールなどが盛んでした。その楽しみの一つに紙芝居がありました。東京都内だけでも、たくさんの紙芝居屋さんがいて、毎日学校から帰ると近所の空き地などに、子どもたちが集まり、紙芝居を熱心に見ました。

紙芝居
昭和22～27年（1947～52）頃
マッカーサー記念館提供

昭和館　〒102-0074　東京都千代田区九段南 1-6-1
TEL 03-3222-2577 ／ FAX　03-3222-2575　https://www.showakan.go.jp

子ども学習シート

第８ブース

復興に向けて

ふっこうにむけて

昭和館常設展示室

戦後、日本は新しい憲法のもとで、平和・民主国家として再出発しました。そして、昭和26年（1951）９月９日には、アメリカのサンフランシスコで世界の48の国々と講和条約を結びました。翌年に講和条約が発効されると、ようやく連合国の占領を終え、主権が回復したのです。続いて、国際連合への加盟が認められ、日本は国際社会に復帰しました。

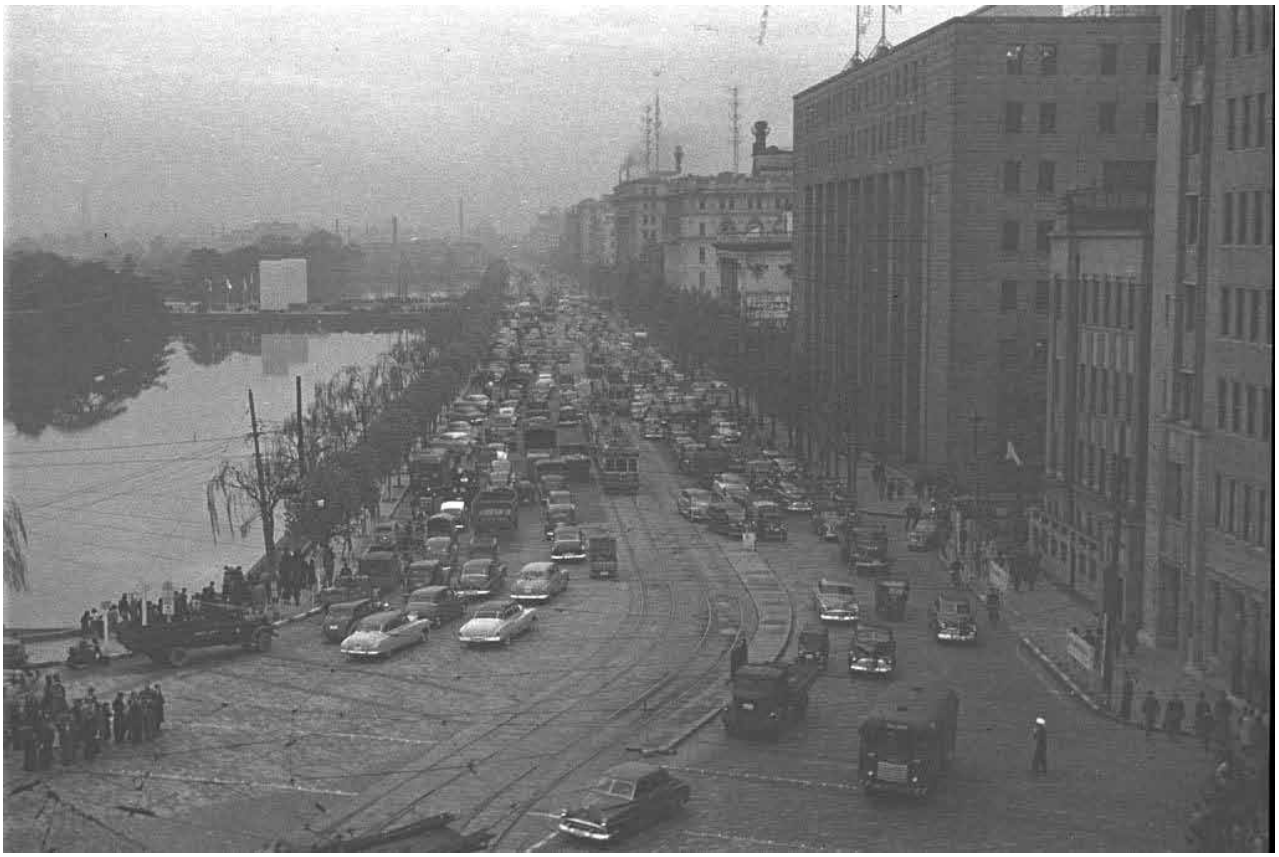
昭和30年（1955）頃になると、白黒テレビ、電気洗濯機、電気冷蔵庫が「三種の神器」と呼ばれ、あこがれの的となりました。電気洗濯機は、お母さんを洗濯の重労働から解放してくれました。なかでも値段が高かったのがテレビで、お父さんの2年分の給料ぐらいの値段だったので、なかなか買うことができませんでした。人々は、駅の前の街頭テレビや食堂や喫茶店のテレビを見たりして、娯楽を楽しみました。テレビが一般家庭に普及するようになったのは、テレビ放送が始まってから10年ほどたった昭和39年の東京オリンピックの頃でした。

「三種の神器」

住宅難緩和のために建てられた戸山ハイツ
昭和24年(1949)8月 米国国立公文書館提供

新しい日本の建設を目指して、人々は一生懸命に働きましたが、あまりにも戦争による傷痕が深く、生きるために欠かせない衣食住の面で大変に苦しみました。そのようなときに、人々に希望と勇気を与えたのが、水泳の古橋広之進選手による数々の世界新記録の樹立と湯川秀樹博士のノーベル賞受賞のニュースでした。恵まれない環境の下で成し遂げた二人の世界的な偉業に、人々は感動し、「やればできる」を合言葉に自信と誇りを取り戻しました。また、各産業の生産量が高まり、貿易も盛んになりました。人々の収入も徐々に増えていきました。さらにスポーツや映画、演劇など娯楽が盛んになり遊園地などのレジャー施設も造られました。

経済の発展とともに、日本の街なかに、自動車がたくさん走るようになりました。そのため、長い間人々に親しまれてきた路面電車が交通渋滞を引き起こすということで姿を消しはじめ、いよいよ自動車全盛時代がやってきたのです。



日比谷交差点
昭和29年(1954)頃 マッカーサー記念館提供

昭和館 〒102-0074 東京都千代田区九段南 1-6-1
TEL 03-3222-2577 ／ FAX 03-3222-2575 https://www.showakan.go.jp